日本酒特区　～日本酒製造の新規免許取得の要件緩和～

男鹿市　稲とアガベ㈱

1 日本酒製造の現状

- 近年行われた酒税に関する規制緩和も追い風となり、地元特産品を用いたクラフトビールやクラフトジン、地ウィスキーなどの分野で新規参入が相次いでおり、地域ならではの酒類として新たな産業の創出や地域経済の活性化につながっている。
- しかし、日本酒製造への新規参入については、既存酒蔵を承継する以外、需給調整の観点から新たな製造免許の取得が認められておらず、日本酒業界においてスタートアップ企業が育たない状況にある。
- 近年の日本酒の国内出荷量は減少傾向にあり、原料となる酒造好適米の生産量も減少するなど、需給調整に関わらず全体的にシュリンクしている。

2 特区提案

提案１　「一定の条件」のもと、日本酒製造の新規免許の取得の要件緩和
提案２　地元産品を用いた酒類の最低製造数量基準（清酒60kℓなど）の緩和

※一定の条件については
○品質の確保や外資・大手資本の参入等の業界の懸念を踏まえつつ
○日本酒業界の発展と地方創生に資する取組事業者に限定することを想定

3 提案の基本的な考え方

- 日本の大切な伝統産業である日本酒や酒造り文化を将来にわたり継承し、持続的に発展させていくためには、「次の世代」を育てる環境を整えていくことが必要。
- 現在、日本酒業界は後継者難や免許制度のハードルの高さから、「次の世代」を担う若者の新規参入が困難。プレミアム価格で取引される免許や、最低製造数量要件に伴う億単位の初期投資が、実質的な参入障壁。
- 意欲と能力のある「次の世代」の造り手が事業に参入できないことは、日本酒業界全体にとって大きな機会損失。
- 品質や事業継続性を担保しつつ、こうした若者が酒造りに挑戦できる仕組みを新たに整備することで、健全な形での新規参入が可能。
- 日本酒特区は、既存の蔵元の方々といたずらに競合するものではなく、協働的な業界発展を目指すものと思料。

4 特区による地域振興や酒類業全体に期待される効果

◎一定の条件を満たした事業者に限り新規免許の取得を認めることにより、需給調整の目的と酒造業界および地域活性化とのバランスを図ることができる。
◎日本酒製造に意欲があるスタートアップ事業者が誕生することにより、酒造り人材の確保や従来の日本酒の枠を超えた新たなファン層(女性・若者など)、マーケットの開拓・拡大など、業界全体に好影響を及ぼす。

●蔵人不足の解消　「自分の蔵を持つ」という目標が労働意欲の更なる向上につながる。
●造り手の多様化　資本ではなく技術が評価される参入が起きることで「次の世代」の担い手が多様化する。
●新市場の創出　他業種企業との連携で新たな事業展開が可能となる。
●地域活性化　国の掲げる「観光立国」や「地方創生」方針と連動し、酒ツーリズムを軸とした地域活性化を後押しする。
➡「酒造り起点とした男鹿の地域づくり構想」（男鹿酒スタートアップシティ）…別添資料

▲稲とアガベ造醸所

▲男鹿市の起業事例を視察した新興企業や投資会社、起業家などの皆さん

▲男鹿駅前での「猩猩宴」

▲男鹿のナマハゲ

5 類似の国際事例

⑴ 韓国：クラフトマッコリ振興政策
- 1990年代以降、段階的に伝統酒の制度改革を実施。
- 2009年「韓国酒産業競争力強化策」により、小規模醸造所の設立要件を緩和。
- 技術者育成のための「マッコリ醸造塾」等も併設。
- 結果として、1000件近い小規模蔵が誕生し、国内外での需要創出に成功。

⑵ イギリス：クラフトジン規制の転換点
- Sipsmith蒸留所が旧来の1800ℓ製造要件に対して規制緩和を申請。
- 小規模蒸留所の設立が合法化され、2009年に113ヵ所あった蒸留所が、2018年には419ヵ所に増加。
- 高価格帯・観光連動型のブランドが地域ごとに続々と誕生。

6 既存の蔵元の懸念

⑴ 過当競争に拍車・・・国内出荷量が減少する中、新規参入を認めれば供給過剰になり、経営が圧迫される。
⑵ 原料確保・・・・・・現下のコメ不足、コメ価格高騰の中で、新規参入者が果たして原料米を確保できるのか。
⑶ 品質の確保・・・・・自由に参入を認めれば品質の悪い酒が出回り、日本酒全体のブランド価値が低下する。
⑷ 公平性の観点・・・・最低製造数量（60kℓ）以下を認めることは、フェアでない。イコールフィッティングであるべき。

7 日本酒特区への提案者の想い

●提案の特区は「自由化」ではなく、「秩序ある変化」を目指すものです。
→　無制限な参入ではなく、既存の審査制等によって品質を担保することは大切と考えます。
●粗悪酒を排し、確かな技術と意志を持つ人材が育つ仕組みを整えます。
→　参入のハードルを下げるのではなく、“登っていける階段”をつくる制度設計であるべきです。
●お金はなくても、腕があり想いのある造り手が、持続的に活躍できる環境を整えます。
→　技術と情熱を評価する仕組みによって、新たな担い手を業界に迎え入れます。
●この循環が、地域に根ざした新たな蔵を育て、次世代の酒造りを担う基盤となります。
→　若手が挑戦でき、育ち、巣立ち、文化をつなぐ場所としての特区です。